

平成 23 年 8 月 3 日	病虫害発生予報 8 月号	茨城県病虫害防除所 茨城県植物防疫協会
--------------------	-------------------------------	------------------------

農薬散布時には周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう。
事前に近隣圃場の農家に一声かけましょう。

—平成 23 年度茨城県農薬危害防止運動期間中です (6/15~9/14) —

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
水稲：いもち病(穂いもち)，斑点米カメムシ類	1
水稲：ニカメイガ	2
大豆：チョウ目幼虫	3
サツマイモ：チョウ目幼虫 (ナカジロシタバ等)	3
ナシ：ナシヒメシンクイ	5
果樹共通：カメムシ類	6
アブラナ科野菜：ハイマダラノメイガ	6
共通害虫：オオタバコガ，ハスモンヨトウ	7
【その他の病虫害】	8
水稲，大豆，サツマイモ，ナシ，ブドウ，秋冬ネギ	
II. 今月の気象予報 9	
<p>最新の農薬登録内容は，(独) 農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm) で確認することができます。</p> <p>水田において農薬を使用するときは，農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに，止水期間を1週間程度とすること。</p>	
<p>詳しくは，病虫害防除所へお問い合わせ下さい。</p> <p>茨城県病虫害防除所 Tel :029-227-2445</p> <p>予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。</p> <p>ホームページアドレス http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/</p>	

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（穂いもち）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、葉いもちの発病度は平年よりやや低く、発生地点率は平年並である。
- ② 7月下旬に低温・降雨が続き、いもち病の感染好適条件と出穂が重なった地域もあり、8月上旬にかけていもち病の発病・進展が予想される。
- ③ 7月下旬現在、水稻の生育は平年並である。
- ④ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想され、発生をやや助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① いもち病菌がイネの穂に侵入しやすいのは、出穂直後から出穂後14日位までである。この期間に降雨が続く場合は、発生に注意が必要である。
- ② 穂いもちを対象とした薬剤防除の適期は、穂ばらみ末期～穂揃期である。葉いもちが多発し、上位葉に病斑が進展している水田では、防除を徹底する。
- ③ 晩植田では、いもち病が発生しやすい傾向があるので注意する。

2. 斑点米カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
早い	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、水田内における発生量は平年より多く、水田周辺のイネ科雑草における発生量は平年並～やや多い。水田における主な発生種は、クモヘリカメムシ、アカスジカスミカメ、イネカメムシである。
- ② 気温の積算状況から推定した本年のクモヘリカメムシの産卵時期は、平年より早い。一部の水田では、すでに幼虫の発生を確認している。

[防除上注意すべき事項]

- ① 斑点米カメムシ類の水田に飛来した成虫を対象とした防除適期は、穂揃期である。穂揃期に成虫を確認した場合は、防除を実施する。
- ② 斑点米カメムシ類の幼虫を対象とした防除適期は、出穂10～15日後頃である。クモヘリカメムシ幼虫の本年の防除適期は、県南・県西地域で7月下旬に出穂するコシヒカリで8月6日～10日頃、県北・県央・鹿行地域で8月初めに出穂するコシヒカリで8月11日～15日頃と予想される。
- ③ 周辺よりも出穂の早い水田、ヒエ等の雑草が多発している水田では、成虫の飛来が集中しやすい。また、出穂の遅い水田では、周辺の水田等で増殖した新成虫が侵入することがあるので、発生には十分注意する。陸稲においても、水稻と同様に発生に注意する。
- ④ 斑点米の発生を防止するためには、特に②の幼虫防除が重要である。防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。

(平成23年7月20日発表の「病害虫発生予察注意報第4号」参照)

防除所レポート [斑点米カメムシ類の発生状況及び発生種について]

- ① 水田における斑点米カメムシ類の発生量は、7月下旬現在、県北・県央・鹿行・県南地域で平年より多く、県西地域で平年並である（表1）。
- ② 水田における斑点米カメムシ類の発生種は、7月下旬現在、クモヘリカメムシが最も多い（表2）。クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、イネカメムシ、アカスジカスミカメの発生地点率及びすくい取り虫数は、過去11年中1位である。

表1 水田における斑点米カメムシ類の地域別生息状況(平成23年7月下旬調査)

地域 (調査地点数)	発生地点率(%)			すくい取り虫数(頭/10回振り)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
県北 (9)	56	20	1	0.4	0.2	2
県央 (15)	27	9	1	0.5	0.1	1
鹿行 (6)	33	15	2-4	5.7	0.3	1
県南 (19)	26	12	2	0.7	0.3	2
県西 (9)	11	8	4	0.1	0.2	7
全県 (58)	29	10	1	1.0	0.2	1

- 1) 平年:平成13～22年までの10年間の平均値を示す。
- 2) 順位:過去11年間に於ける本年値の順位を示す(2-4は2位から4位まで同じ数値であることを表す)。

表2 水田における斑点米カメムシ類の種類別生息状況(平成23年7月下旬調査)

カメムシ類の種類	発生地点率(%)			すくい取り虫数(頭/10回振り)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
クモヘリカメムシ	13.8	4.5	1	0.46	0.10	1
ホソハリカメムシ	5.2	0.6	1	0.04	0.00	1
イネカメムシ	6.9	0.1	1	0.13	0.00	1
アカスジカスミカメ	12.1	2.1	1	0.33	0.03	1
アヒゲホソミドリカスミカメ	6.9	1.7	1	0.04	0.05	4

- 1) 平年:平成13～22年までの10年間の平均値を示す。
- 2) 順位:過去11年間に於ける本年値の順位を示す。

3. ニカメイガ (第二世代幼虫)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、第一世代幼虫による被害株率及び発生地点率は平年よりやや高い。
- ② フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は、水戸市及び筑西市では平年より多く、龍ヶ崎市では平年よりやや多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 本虫の発生は、近年、局地的に増加している。第一世代幼虫による被害が多い水田では、第二世代幼虫を対象に薬剤防除を8月上旬～中旬に実施する。防除の際には、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。

大豆

1. チョウ目幼虫

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、寄生幼虫数は平年より多く、発生地点率も平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。幼虫の発生種については、4ページの防除所レポートを参照する。
- ② 薬剤散布の際は、葉裏や株元にも薬剤がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

サツマイモ

1. チョウ目幼虫(ナカジロシタバ等)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、発生地点率は平年よりやや高く、被害葉率は平年より高い。また、ナカジロシタバの寄生幼虫数は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ナカジロシタバは、第三世代幼虫の被害が最も大きい。ナカジロシタバ第三世代幼虫の発生は、9月上旬頃からと予想される。老齢幼虫になると防除効果が劣るので、若齢～中齢幼虫の時期（丸く穴の開いた葉が散見される時期～葉面積の25%程度を食害された葉が目立つ時期）の防除に努める。薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。

昨年の大豆作では、チョウ目幼虫の葉や莢への被害が目立ち、稔実不足等による収穫時期の遅れや収量・品質の低下を招いた。大豆の葉を食害するチョウ目幼虫は、主にハスモンヨトウが問題とされているが、昨年8・9月下旬の調査におけるチョウ目幼虫の発生主体は、ハスモンヨトウとオオタバコガであった(図1)。本年7月下旬調査でも、オオタバコガやツメクサガ等の幼虫の発生を確認しており、次世代幼虫の多発生が懸念される。

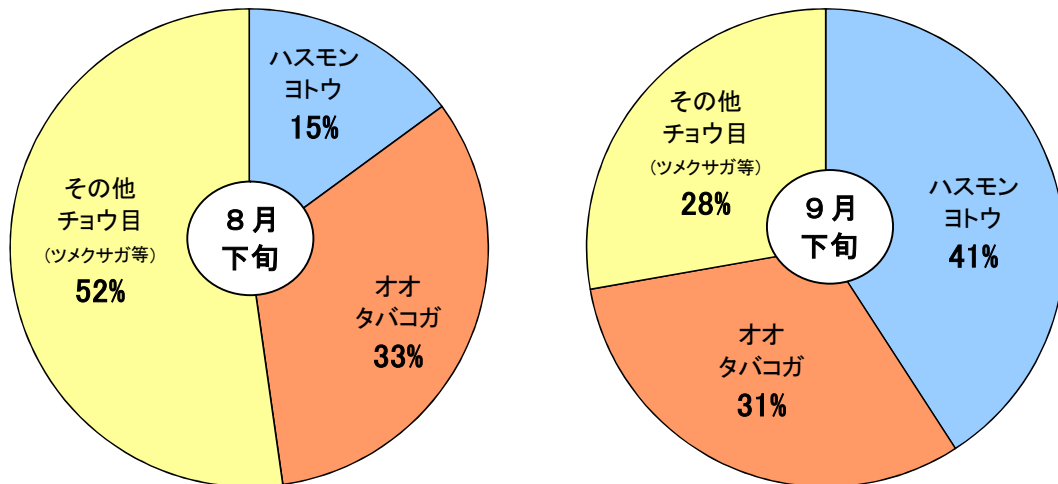


図1 平成22年8・9月下旬の大豆巡回調査におけるチョウ目幼虫の発生内訳(25株調査における寄生虫数より)

ハスモンヨトウ、オオタバコガ、ツメクサガの若齢～中齢幼虫の大きな特徴を図2に示した。いずれのチョウ目幼虫も、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、圃場をよく見回り、若齢～中齢幼虫の時期を逃さずに防除することが大切である。また、発生状況等について、今後の情報に注意する。



図2 大豆の葉を食害する主なチョウ目の若齢～中齢幼虫の特徴

ナ シ

1. ナシヒメシンクイ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在，県予察圃（笠間市）に設置したフェロモントラップへの第二世代成虫の誘殺数は，平年よりも多く，多発生した平成18年よりも多い。
- ② 7月下旬現在，地区予察圃（かすみがうら市）に設置したフェロモントラップへの第二世代成虫の誘殺数は，平年並である。
- ③ 7月下旬現在，被害果率は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果を見つけた場合は，土中深く埋めるなど速やかに処分し，次世代成虫の発生を防ぐ。
- ② 薬剤散布は，10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など，薬液のかかりにくい部分に対しては，手散布等により補正散布を行う。
- ③ 薬剤散布を行う場合は，収穫前日数に十分注意する。
- ④ 早生品種（「幸水」など）で被害果が認められた場合は，晩生品種（「豊水」や「新高」など）を対象に薬剤散布を徹底する。

防除所レポート [積算気温によるナシヒメシンクイの防除適期の予測]

- ① 晩生品種を加害するナシヒメシンクイ第四世代幼虫を対象とした防除適期は，**第三世代成虫のフェロモントラップへの誘殺数が最高に達した日の直後**である。
- ② ナシヒメシンクイの発育に有効な気温の積算値から，次世代成虫（第三世代）の誘殺数が最高に達する時期を予測すると，表の結果となる。
- ③ 発生時期の予測は8月1日現在であるので，今後の情報を引き続き参考にする。

表 ナシヒメシンクイ第四世代幼虫を対象とした防除適期

第三世代成虫の誘殺最盛日²⁾の直後

地点	予測される防除適期	(参考) 第二世代成虫の誘殺最盛期 ¹⁾
笠間市（旧友部）	8月22日～7月26日	7月第6半旬
笠間市（旧岩間）	8月18日～8月21日	7月第4半旬
小美玉市	8月22日～8月26日	7月第6半旬
石岡市	8月5日～8月8日	7月第2半旬
かすみがうら市	8月15日～8月17日 ³⁾	—
土浦市	8月13日～8月16日	7月第4半旬
筑西市	8月18日～8月20日 ³⁾	—

1)各地点に設置したフェロモントラップへのナシヒメシンクイ第二世代成虫の誘殺最盛期
 2)ナシヒメシンクイの発育零点を11.1℃とし，第二世代の誘殺最盛期からの有効積算温度が384日度となる日を予測した（8月1日現在）。
 3)第二世代の誘殺最盛日が不明瞭なため，第一世代の誘殺最盛期から予測した。

果樹共通

1. カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並～やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、被害果率は平年並である。
- ② 7月下旬現在、予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、かすみがうら市では平年並、水戸市・笠間市では平年よりやや少ない。
- ③ 7月下旬現在、主要な餌場及び繁殖場所であるヒノキ林での果樹カメムシ類の発生は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 夜温が高いと活動が盛んになり、果樹園へ飛来するので、このような場合は発生に注意する。
- ② 園内をよく観察し、カメムシ類の飛来を確認したら、活動が鈍い早朝に薬剤散布を行う。
- ③ 今後、果実肥大をするカキやリンゴでは、飛来する恐れがあるので注意する。

アブラナ科野菜

1. ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、笠間市で実施している誘致植物(クレオメ)を用いた発生予察調査において、ハイマダラノメイガ幼虫の寄生株率は、平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後、播種や育苗・定植を行うアブラナ科野菜は特に注意する。
- ② 本虫は、アブラナ科野菜の幼苗期（育苗期や本圃での生育初期）に、幼虫が生長点付近を加害する。加害されると芯止まりになるので、早期発見、早期防除に努める。また、薬剤の育苗トレイ灌注や定植時の粒剤施用は被害を未然に防ぐために有効である。
- ③ 苗床は、防虫ネット（1mm 目合い程度）などで覆い、成虫の侵入を防ぐ。
- ④ 薬剤散布は、株の中心部や葉裏にも薬液がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発生を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、水戸市・龍ヶ崎市で平年より多く、筑西市でやや多く、土浦市で平年並である。
- ② 7月下旬現在、大豆等で幼虫の発生を確認している。

[防除上注意すべき事項]

- ① オオタバコガは、8月頃から発生が増加する第二世代以降の幼虫の被害が大きい。圃場をよく観察し、幼虫の早期発見に努める。齢期が進むにしたがって薬剤の効果は低くなり、中齢幼虫になるとナス等の果実やレタス等の結球内に食入するため、食入前の若齢幼虫のうちに防除を徹底する。レタスでは、薬剤の育苗トレイ灌注は被害を未然に防ぐために有効である。
- ② 施設栽培では、開口部に防虫ネットを設置する。
- ③ 薬剤散布は、葉裏や株元にも薬液がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

2. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は水戸市・笠間市・土浦市・龍ヶ崎市で平年よりやや多く、鉾田市・筑西市で平年並である。
- ② 7月下旬現在、大豆等における幼虫の発生量は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハスモンヨトウは、8月頃から発生が増加する。圃場をよく観察し、白変葉及び若齢幼虫の集団の早期発見に努める。幼虫が中齢以上になって分散して食害するようになると、被害量が増大するだけでなく、薬剤の効果も低くなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② レタスやハクサイ等では、結球への食入を防ぐため結球前に防除を徹底する。また、薬剤の育苗トレイ灌注は被害を未然に防ぐために有効である。
- ③ 施設栽培では、開口部に防虫ネットを設置する。
- ④ 薬剤散布は、葉裏や株元にも薬液がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	紋枯病	発生量：少ない	7月下旬現在， 平年より少ない発生である。
	縞葉枯病	発生量： ー	7月下旬現在， 県西地域の一部圃場で発生を確認した。本病を媒介するヒメトビウンカの水田における発生量は平年より多い。
	イネツトムシ	発生量：平年並	7月下旬現在， 平年並の発生である。葉色が濃い水田では発生に注意する。発生が多い場合には， できるだけ早く薬剤防除を実施する。(平成23年7月20日発表の「病害虫速報 No. 3」参照)
大豆	紫斑病	発生量： ー	防除適期は開花期の20日後頃である。開花期以降から成熟期までに連続した降雨があると， 発生が多くなるので注意する。
	カメムシ類	発生量:平年並	7月下旬現在， 平年並の発生である。
サツマイモ	イモキバガ (イモコガ)	発生量:やや多い	7月下旬現在， 平年よりやや多い発生である。
ナシ	黒星病	発生量：平年並	7月下旬現在， 平年並の発生である。発病している果実及び葉は， 見つけ次第取り除き， 土中深く埋める。
	ハダニ類	発生量：平年並	7月下旬現在， 平年並の発生である。
ブドウ	べと病	発生量：やや多い	7月下旬現在， 平年よりやや多い発生である。
	褐斑病	発生量：平年並	7月下旬現在， 平年並の発生である。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量：多い	7月下旬現在， 夏ネギにおける発生は平年より多い。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 7月30日から8月29日)

気象庁 (7月29日 発表)

<向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	30	40	30
降水量	関東甲信全域	20	40	40
日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 7月30日(土曜日)から8月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率70%

<2週目の予報> 8月6日(土曜日)から8月12日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率40%

<3週目から4週目の予報> 8月13日(土曜日)から8月26日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。